

「狭衣物語」から室町時代物語「さごろも」へ

— その改作方法について —

真 島 美 弥 子

はじめに

物語史上、改作という行為は綿々と繰り返されて来た。一つの作品の全面的な作り変えはもとより、同一作品内の異本一本一本の派生に至るまで、改作とは物語を支える作者・読者の熱意からなされるものであり、同時にその文化を反映するものでもあった。

ここで取り上げる室町時代物語（以下「室町物語」とする）「さごろも」⁽²⁾は、王朝の「狭衣物語」をもとにしている。しかしながら、現在私たちが手に取ることのできる約三十本、八種の内容に大別されるその伝本群は、形態の面からは奈良絵本・絵巻、又は絵なしの単なる写本、あるいは版本という形をとり、本文も類型的な室町物語の筋と詞章とから成る。しかも、これら八種の本文は、それぞれが異った完成を遂げているのである。このような特徴は、ひとり「さごろも」に限らず、少しずつの違いはあれ、前代の物語をもとに室町物語とされた作品群⁽³⁾に共通するものであろう。これらのうち、「さごろも」は原作との比較の可能な唯一の作

品ともいえる。ここでの、原作から室町物語、さらに各テキストへと展開は、それを順を追って辿ることによって、室町から江戸初期にかけての一つの作品の変貌の様相を体系的に把握することを可能とするだろう。また、そこに見られるそれぞれの改作方法を明らかにして行くことは、同時に、室町物語の文学としての特質や、それを支えて来た地盤を明らかにすることにもつながると思う。

このような見通しの上に立って、今回は、原作である「狭衣物語」と、室町物語の祖本に最も近いと考えられるテキストとの比較を基礎にして、「狭衣物語」から室町物語「さごろも」への改作の方法を検討してみることにした。

注

(1) 「今とりかへばや」「海人の刈藻」「中村本寝覚物語」「しのびね物語」など。

(2) 題名は伝本によって、「さごろも」「さごろものさうし」「狭衣中将物語」「飛鳥井大しやうさうし」など様々であるが、ここでは最も

多い例に従い「さごろも」とする。

- (3) 「一本菊」「扇流し」「あま物語」「岩屋草子」「しぐれ」「ふせや」「あめ若物語」「若草物語」など（市古貞次氏『中世小説の研究』（昭和三十年）七十七～八頁。中野莊次氏『風葉和歌集考』（『国語国文』第三卷二・三号、昭和八年二・三月）に詳しい。

一

まず、現存諸本のうちから、室町物語の祖本に最も近いと考えられるテキストを選定したい。「さごろも」の諸伝本は、既に清水泰・市古貞次・横山重・松本隆信・橘（佐藤）りつの諸氏によって詳しい報告がなされている。私はこれら先学諸氏、とりわけ網羅的な調査と分類においては松本隆信氏の報告を指針としながら、約三十の伝本を確認した。それらは筋の上からA B二系統、八類に分類することができる。次にその所屬と形態を紹介しよう。

A系統

第一類

- (8) 慶応義塾図書館蔵写本 一冊

第二類

- (9) 都立中央図書館加賀文庫蔵奈良絵本 二冊
(10) 国会図書館蔵奈良絵本 上下合二冊
(11) 吉田幸一氏蔵絵巻 一卷

B系統

第三類

- (10) 慶応義塾図書館蔵写本 一帖
(11) 内閣文庫蔵写本 一冊
(12) 吉田幸一氏蔵写本 二冊

「狭衣物語」から室町時代物語「やうらゐ」

第四類

- (13) 東京大学国文学研究室蔵写本 二冊
(14) 村口四郎氏旧蔵奈良絵本 二冊
(15) 吉田幸一氏蔵奈良絵本 三冊
(16) 寛永頃無刊記丹緑本 一冊
(17) 明暦三年刊絵入本 二冊
(18) 寛文五年刊絵入本 二冊
(19) 岡山大学池田家文庫蔵奈良絵本 二冊
(20) 名古屋大学図書館蔵奈良絵本 三冊
(21) 大谷女子大学図書館蔵奈良絵本 三冊
(22) 実践女子大学図書館蔵奈良絵本 三冊
(23) 京都大学図書館蔵写本 一冊
(24) 岩瀬文庫蔵奈良絵本 三冊
(25) 高安六郎博士蔵奈良絵本 三冊
(26) 光慶図書館蔵奈良絵本 一帖
(27) 穂久邇文庫蔵写本 一冊
(28) 吉田幸一氏蔵写本 一冊
(29) 実践女子大学図書館蔵写本 一冊
(30) 実践女子大学図書館蔵奈良絵本 三冊
(31) 吉田幸一氏蔵写本 一冊
(32) 国会図書館蔵写本 一冊
(33) ①吉田幸一氏蔵奈良絵本 三冊
(34) ②赤木文庫蔵奈良絵本 三冊
(35) 武田祐吉氏旧蔵奈良絵本 三冊

上下合二冊

結論から先に述べると、ここでは、一、内容が原作である「狭衣物語」（以下「原作」とする）に近く、書写年代も比較的古い。二、しかも、室町物語諸本への展開を合理的に説明できる。という二つの理由から、第一類のテキストを室町物語の祖本に近いものと想定した。

①主人公の紹介 ②天人降下 a 五月五日、女との贈答 b 女主人公の紹介		○	○	第一類 第二類 第三類 第四類	A系統
		○	○		
		○	○		
		○	○		
		○	○	第五類	B系統
	○	○	○	第六類	
		○	○	第七類	
	○	×	×	第八類	

[illegible]

二

次に、室町物語の紹介も兼ねて、原作である狭衣物語との筋の上での関係を確認しておきたい。次の表では両者を比較し、室町

物語が原作に何らかの形で関わっている項目には(一)の番号と見出しを付けた。どちらかにしか見られない事項の場合は見出しは付けず、それを持たない側は空欄とした。なお、便宜上室町物語は全体をⅠ～Ⅴの段に分けた。

(一) 狭衣の周辺と天人降下	「狭衣物語」	室町物語「さごろも」
<p>〈巻一〉(物語第一年)堀川大殿の子狭衣中将は妹背として育った源氏宮を恋慕している。五月五日の夜、狭衣は御前の広間で笛を吹き、天稚御子が天下る。帝はそれによって、女二宮を賜う事を約す。</p>	<p>狭衣の源氏宮への思いは強い。一方、父大殿は女二宮を勧める。</p>	<p>〈Ⅰ〉①北野の天神の御時、関白内大臣の子に狭衣の中將あり②秋の最中、南殿で笛を吹き、天人が天下る。③十八で大將になり、よしたかの大將の娘を娶ってかしくく。</p>
<p>(二) 狭衣と飛鳥井女君の出会い</p>	<p>ある夏の夕暮、二条大宮あたりで狭衣は仁和寺の威儀師に拘引された女君を救い、家に送る。女君は故師中納言の女で乳母と暮らす。狭衣はこの女君と行末を契るが、源氏宮への思いは消えず。</p>	<p>④二条万里小路の帥中納言の女、飛鳥井姫君は、清水に参り太秦に籠る。姫に心を移した清水の三位の阿闍梨は姫を誘拐する。⑤頃は二月望月のたそがれ、三条辺でこの車に出会った大將は僧を追ひ払う。⑥大將は姫を家まで送る。姫は大將の名を聞きそびれる。⑦二人は契りをこめるが、妻のある大將は姫を迎えられず。四月頃姫は懐妊し、程なく十一月になる。</p>
<p>(三) 女君の乗船まで</p>	<p>堀川大殿の妻の一人である洞院上は、今姫君を養女にする。</p>	<p>〈Ⅱ〉⑧大將の乳母子の兵部大夫は、飛鳥井の姫を大式で下る九州へ伴わんとし、父帥中納言に申し込む。⑨両親はこれを汲るが、狭衣大將の権勢を恐れて承諾する。⑩出発の前日、これを姫に申し渡す。⑪その夜訪問した大將に、姫はこのことを打ち明ける。大將は翌日の夕暮に姫を迎え取ることを約す。⑫翌朝、姫は母に別れを告げ、⑬大將への文を女房に托して迎えの車に乗る。⑭淀の津に着いた姫は、わが身を王昭君楊貴妃になぞらえて悲嘆する。</p>

(四) 狭衣の悲嘆と女 君の投身	女君を失った狭衣は悲嘆する。一方、女君は願ふことから道成の素姓を知り、わが身をはかなむ。虫明で入水せんとするが、折から女君を尋ねて来た兄僧に引き留められる。	⑮文で失踪を知った大將は⑩隨身を連れて諸国の山々寺々へ参る。⑰一方、姫は大夫から見せられた願によって、自分の許に通った男君が狭衣であること、大夫の素姓を知り、入水进行。⑱姫は室の津で海へ飛入るが、偶然下にいた兄の舟の阿蘭梨(以下「兄僧」)の小船へ落ち、助かる。⑲二人は京へ上る。⑳大夫は搜索も空しく筑紫へ下る。
(四) 京での女君と兄 僧	兄僧は女君を伯母である常磐の尼の許へ預け置き、自らは修業の旅に出る。	へⅢ⑳京へ着いた兄僧は、姫を置いて一人で父母の所へ行き、いきさつを話す。立腹した父中納言は、姫と兄僧に勘当を申し渡す。㉑兄僧は姫を、兄僧の乳母である常磐の尼の許へ移し、㉒自らは大臣邸へ行き、人から大將の失踪や大臣夫妻の嘆きの様を聞く。㉓これを姫に報告し、大將を尋ねて諸国行脚に出る。㉔十二月二十日に姫は女兒(以下「小姫君」)を出産する。㉕兄僧は再三大臣邸の周辺へ行き、大將が一夜だけ戻ったことを聞く。姫を励ましつづ三年が過ぎる。㉖また、兄僧は書写・天王寺・住吉・高野を尋ねるが、会えず。
(六) 大夫の報告と狭 衣の懊惱	〈巻二〉(物語第二年) 早春・狭衣は帝から降嫁を急がれていた女二宮に、物の紛れに近づく。懷妊した女二宮は病氣を装い退出、出生した男児は母の大宮の子とされる。大宮は名乗らぬ狭衣を恨みつづ薨去、女二宮も出家する。 (物語第三年) 正月、帰洛した道成から入水のことを聞いた狭衣は、改めて女君を思う。	㉗京へ帰った大將は、父母に留まることを誓う。㉘筑紫から上った大夫は、願を持参して大將に姫の入水を報告する。㉙絶望した大將は、出家を決定して再び家を出る。㉚これを悲しんだ大臣夫妻は出家を遂げる。㉛兄僧は姫を慰め、㉜大臣邸の辺で夫妻の出家を聞き、㉝聴聞に参って、その様を見る。
嵯峨帝の讓位あり。新帝への入内を準備していた源氏宮は、一条院の崩御により、齋院に決定する。(物語第四年) 狭衣はこれに絶望する。		

(㉔) 狭衣と兄僧の出 会	世を疎ましく思う狭衣は密かに粉河へ参籠。千手陀羅尼を読む僧に声をかけ、僧が女君の兄であることと、女君の生存とを知る。	④Ⅴ ⑤常磐へ帰った兄僧は大臣夫妻の様を姫に報告し、⑥大仏を尋ねることを思い立って出発する。⑦大仏殿に籠っていた大將は、千手経を読む僧に話しかけ、その素姓と親の不孝を蒙ったいきさつを聞く。
(㉕) 狭衣、常磐へ行 く	⑧卷三 翌朝、狭衣は兄僧を尋ねるが会えず、女君の危篤で寺を去ったことを知る。(物語第五年) 春、狭衣は今姫君の母代から女君のことを聞く。常磐を訪問した狭衣は兄僧と尼君に会い、翌日が四十九日であることや、遺児のことを知る。	⑨大將が名乗ろうとした瞬間、兄僧は尼に呼び出されて席を外す。大將は兄僧を捜し回り、尼から、姫の臨終で帰ったことを聞く。⑩大將はそのまま尼から聞いた伏見、常磐を捜し回り、たどり着く。⑪阿闍梨に声をかけられて庵室に入った大將は、それまでのことを語り合って互いに涙にむせぶ。
(㉖) 女君の遺児との 対面	女君の遺児が一品宮にいたことを知った狭衣は、宮の様子を窺って浮名を流される。父大殿は宮の降嫁を乞い、結婚に至る。狭衣は一品室には冷淡で、遺児の姫君を可愛がる。また、女君の法要を営む。 (物語第六年) 狭衣の源氏宮や女二宮への思いは絶えず。嵯峨院女一宮を世話し、入内させる。 出家を決意した狭衣は齋院を訪問し、琴を弾いたところ、神殿が鳴動。⑫卷四 結局、出家は賀茂大明神の神託によって留められる。 (物語第七年) 狭衣は宰相中将妹姫と結婚、一品宮とは遠ざかる。 (物語第八年) 疫病流行があり、帝が讓位を考えている折、神託によって狭衣の即位が決定。入内した宰相中将妹姫は宮の女御と呼ばれ、懷妊する。 (物語第九年) 女二宮腹の若君と飛鳥井女君腹の姫君は成長し、袴着と裳着あり。	⑬大將は小姫君に会うために「一あんの宮」へ参り、花園山に出ている三人の幼児の中にわが子を見つけて語り合う。
(㉗) 女君の遺品	常磐の尼君の死去により、今は一品宮と呼ばれる女君の遺児は女君の遺品を得る。狭衣帝は感慨にひたり、絵巻一卷を経に仕立てて供養する。	⑭大將は小姫君から姫の臨終のありさまを聞き、大將への思いを綴った十二巻の恋尽しを見る。

④常磐へ帰った大将と小姫君は姫の墓前で泣き悲しみ、墓を掘り起す。⑤小姫君が仏に祈誓をかけると、観音の慈悲によって姫は蘇生する。

へVへ⑥隨身のかけふさは大臣夫妻に大将の行方を報告する。⑦迎えの車が庵室前に集い、周囲の人々は驚く。⑧帥中納言夫妻は、狭衣大将の噂を聞いて、姫のことを案じ合う。⑨帥中納言が大臣邸へ参ったところへ帝の御幸あり。大臣は中納言も聞く前で、大将の今迄のいきさつを奏上する。⑩大臣は関白を大将に譲り、後世をねがう。関白となった大将夫妻の子孫は、関白を今に伝える。小姫君は七歳で后宮となり、阿闍梨は天台山の僧正となる。⑪帥中納言は北の方に自らの過ちを告げ、兄僧とも和解する。⑫狭衣と飛鳥井は若君と姫君を数多くもうけ、百二十年の齢を保ち、榮える。⑬このことはめでたい例とされている。

物語の一典型について『文学』第四十四卷九号・昭和五十一年九月。

三

さて、飛鳥井女君と狭衣が幸福な結末を迎える室町の「さごろも」の物語は、どのように作製されているのだろうか。筋に沿って見て行くことにしたい。

へIへここでは、二人の紹介と、出会いが内容とされる。はじめに、それぞれの人物像に注意しておきたい。①で素姓・容姿・能力など申し分ない貴公子とされる男君は、③に見られる妻の他は松本隆信氏の指摘されるように女性関係はなく、原作での恋の苦悩の影は断ち切られている。また、④で紹介される女君も原作

この表の上からの比較の結果をまとめておこう。室町物語「さごろも」は、主人公狭衣と源氏宮・飛鳥井女君・女二宮・一品宮・宰相中将妹姫など多くの女性達によって織りなされている原作の中から、狭衣と飛鳥井女君との恋およびその周辺のみ取材している。室町物語はI～Vの段に沿っていえば、I二人が出会い、II離別し、III苦難を味わい、IV再会を経て、V幸福な結末に至るという室町物語に多く見られる筋の型をとっており、原作とはかなり異っている。このうちI～IVの③までには、(一)～(中)の各項に見られるように原作と何らかの関わりが見られ、それ以降のVの④⑤とVには関係は認められない。

注(1) 岩波日本古典文学大系『狭衣物語』を用いた。

(2) このことは、ジャクリーヌ・ビジョー氏が指摘されている(中世

での不幸な境遇から一転して、両親である中納言夫妻に育まれる身の上となり、⑥では男君が以前から憧れていた有名な美女だとされる。二人の出会いである⑤⑥は原作に近いが、構想の上から③の男君の妻が設定されたり、⑦のように女君の懐妊が早められたりしていることにも注意しておきたい。

〈Ⅱ〉女君が九州下りの船に乗せられること、入水を決意すること、及び奇跡的に救われることなど、大きな運びは原作に近いといえる。しかし、その詳細はかなり違って来る。例えば、乗船までの過程が両親が生存している為に、⑧⑩のように両親の相談と女君への宣告という形に改められたり、女君を失った男君が、直ちに寺社参りに出発する(⑮⑯)こととされる。これらはⅢ以下の展開とも関わるものである。

〈Ⅲ〉Ⅲ以下の運びは原作とは大きな違いを見る。尼の許へ身を寄せていた女君が、出産の後にひっそりとはなくなる原作に比べて、室町物語では、流浪の旅に出た男君と兄僧とが偶然に出会い、それを契機に女君も蘇生し、幸福な結末に至っている。このような室町物語の展開は、女君の両親の生存がその前提となっている。ここでは、京に戻った兄妹が苦難を受けるのは、両親に不孝を蒙ったためとされる。そしてこれは、男君との再会後に誤解の解けることによって解消され(④⑨・⑤①)、めでたい結末が約束される。ここには、筋の展開を得るために、原作の乳母から両親へと人物設定を変えた室町物語の作意が見てとれる。

兄僧と男君による旅は、このようにして得られた筋の上に、原

作からの趣向を取り入れて成り立っている。妹の為に男君を捜す兄僧は、女君を置いて修業に出るところから発展させたものであろうし、男君の流浪には大夫の報告も取り入れられている(②⑧③④)。また、男君を失って出家する大臣夫妻の様(③①③④)は、原作での夫妻の子を言愛する性格からの着想ではないだろうか。

〈Ⅳ〉大仏での兄僧と男君との出会い(③⑦)は、粉河での両者の出会いから着想したものであろう。ここでは常磐への訪れ(④⑥)や遺児との対面(④②)をそれに連続させ、更に女君の蘇生(④④④⑤)という逆転に一気に導く。

(Ⅴ)ここでは前の段の女君の蘇生によって大団円となる。大臣夫妻や帝による祝福(④⑨)、両親との和解がなされ(⑤①)、繁栄する人々の姿が述べられる(⑤②)。めでたいことはをもって結びとするのである(⑤②⑤③)。

以上、筋に沿ってざっと述べてみた。複雑な構想から成る原作「狭衣物語」から一組の男女の恋愛に絞って取材している室町物語「さごろも」では、まず登場人物を類型化するという手続きがとられる。原作中のそれぞれの事件は、その上で筋に合わせた形に新たに捉え直しがなされる。更にここでは個有名詞の部分的な変更や、時間的な再構成もされており、その上でⅠ～Ⅴのような筋を持つ室町物語として仕立てられているのである。

注(1) 新潮日本古典集成『御伽草子集』(昭和五十五年)三七四頁。

(2) 「大しやう、扱は、これぞ、をとに聞し、そつの中納言のひめ君・あすかいのひめと、聞し人なるらん、いかにしてか此人をみると、思

ひつるに、誠に、聞しよりすくれて、いつくしかりけり『大成第六
三三頁』

(3) 室町物語の上では、男君は妻のある為に女君を迎えることができない。しかし女君の懐妊を知って迎えを決意し、出発前夜にそれと知らずに翌夕の迎えを約する。

四

最後に、場面や詞章の作製の方法をいくつかの具体例を通して検討したい。まず、原作と場面が共通する場合の例として、二人の出会いの場面(5)をあげよう。

〈室町物語「さごろも」〉

(a) ころは、きさらきもち月、たそかれときにやありけん、
大しやう、内裏より、かへらせ給へは、(b)三条のへんにて、
女ぼうの車の、(c)下すたれのすきより、僧のすかた、見
えければ、(d)さつしき、こてのり、車を留て、(e)
いかに、此君のみゆきに、のりあひをば申とて、はちかはしく、
さかしければ、(f)此僧は、はしりおりて、いつくともな
く、うせにけり、(g)僧のともなりける、わらはをとらへ
て、とひければ、(h)さん候、是は清水に三位のあしやり
と申人にて候か、うつまさとやらんに、ことひめ君の、こもら
せ給ひ候つるを、はかりことにて、ぬすみ出しまいらせて、り
やう車にて、とをらせ給ひ候を、のりあひと、御とかめ、こと
はりとそ申ける

〈狭衣物語〉

(a) たそがれ時の程に、(b)二条大宮が程に遭ひたる
女車、牛の牽き替へなどして、「遠き程よりか」と見ゆるに
(c)側の物見少しあきたるより、円頭のふと見ゆるは、此御
車を見るなるべし。速う遣り過しつれば、「あやし、僻目か」と
おぼすに、供なる童の持たる物やしるからん、(d)此
御供の隨身など、見つけて、がや／＼と追ひ留むるに、え逃げ
で引き留められぬ。(e)若き隨身、いたく咎めかゝりて
「下簾懸け給へるは、僧綱にこそおはすらめ」「さはあるとも、
しばし追ひ留めては、過し給はで、あやにくに競ひてぞ遣り来
る」「誰ばかりにかをはすらん」と、荒らか(に)問ふに、「仁
和寺の何がしの阿闍梨の車にて、母上の、太秦に参りて帰らせ
給なり。荒牛にて心にまかせず走り侍るを」とわな／＼き出づる
を、「いで、さは、げに尼かと見ん」とて、簾を引き上ぐるに、
(f)法師の、下り走りて、顔を隠して逃ぐるを、「この尼君
はなど逃ぐるぞ」と、追ひつきて走るを、御車をとめて、
「かうなせぞ」と、いはせ給へば、(g)法師をば逃して、
牛飼童を捕へて、「何者ぞ、／＼」と問へば、(h)仁和寺
になにがしの威儀師と申人なり。年頃懸想じ給へる人の、太秦
に日頃籠り給へるに、出で給とて、車借り給へれば、喜びなが
らたてまつり給ひて、女君ひとりを盗みてをはするなり。(以下
略)

この場面のよう、筋の上で原作に比較的近い場合は、基本的

には原作の縮少概略化の方向で詞章が作製されている。ここでは、原作と室町物語の(a)~(h)は順序と内容においてほぼ一致する。これは、室町物語の作者が原作を傍に置いて詞章を作製して行つたことを想像させる。細かい語句を見てみよう。㊦の場合はそのまま、㊧㊨の場合は少し形を変えている。また、㊩のように原作の該当部分から、やや離れて位置する語句をも取り入れている跡も認められる。しかし、単なる縮少ではなく、(e)~(f)のように、直接筋の動きと関わらない複雑な叙述内容は省略して二人の出会いに集約させた内容としている。また、㊪㊫㊬のように、時間的地理的に、あるいは人物名などにも室町物語には構想の変化とも関わる改変が加えられている。

今度は、筋との関係から場面構成が変わる場合を見てみよう。次にあげるのは失踪前夜の二人の対面の場面(㊭)である。

〈室町物語「さごろも」〉

その夜、大しやうも、御わたりあり候か、なとやらん、さはきこそ、あやしけれと、いかなる御ことの、わたらせたまふとて、いつよりも、心さはきこそ、物さひしけの、ありさまなれと、さし入て見給へは、ひめ君は、きぬ引かつき、ふしたまへり、いかに／＼と、のたまへは、何とも、のたまわす、なきたまへり、大しやう、されはこそ、心さわきのありつるに、いかなることの、有やらんと、心くるしく、何事と、とひたまへは、いかなる事の、侍るへき、たゝ、世の中の、はかなき事をこそ、おもひつゝくるにこそと、のたまひければ、大しや

う、されはとて、何事の侍るへき、いまはしやと、なくさめまいらせたまひて

〈略〉

たゝいまはかりと、おほしめして、かくとも、いはまほしくは、おほしめせとも、我をいそぎむかへよと、いふやとおほすらんも、いとつかしやとて、かくなん

㊮ せきかへす 涙のふちや あすか川 しつみてのちは おもかけの夢

と、なかめたまひければ、大しやう、いまはしの御事や、いかで、かやうには、のたまふとて

㊯ かつら川 こゝろなくも 思ひみよ うらみはすゑもとをらさらまし

と、うち詠め、なくさめまいらせ、たまへとも、ひめ君はたゝいまはかりと、思ひて、せんかたなくて、又、きぬ引かつき、ふしたまふ

〈狭衣物語〉

〔A〕 野分の立ちて、風いと荒らかに、窓打つ雨も物恐ろしきに、例の、しのびておはしたり。〈略〉

〔B〕 例の、夜深く帰り給て、少しうちまどろみ給へる夢に、「この女君の、かたはらにある」と、おぼすに、〈略〉 常よりも物心細げにも

㊰ 行方なく身こそなり行けこの世をば跡なき水のそこを尋ねよと言ふ程に、〈略〉 ふと驚かれて、何となく、胸うち騒ぎ給ふ

を、やゝ抑へて、「うけ給はりぬ」と、聞えさせ給て、「あやしう、いかに見えつるぞ。例ならぬ事やあらん、今ぞ、思し合する事どもありて、「心細げなりける気色、常の事なれど、いかなるにか」と、「心騒ぎ」せられて、たゞ今も、ゆかしうおぼつかなきに、「夜さりも、さらば、え行くまじきにや」と、わりなければ、御文をぞ書き給。「常よりも。今も、乱りの心地してこそ。明日も物忌なれば、え物すまじきにや」。

③飛鳥川あす渡らんと思ふにも今日のひるまはなをぞ恋しき今、語り合すべき夢をさへ、心もとなく」など、細かなれば、御返には、

④渡らなむ水増りなば飛鳥川あすは淵瀬になりもこそすれ翌日の下向のことを二人とも知らぬ原作に対し、前もって母からそれを告げられている室町物語では、当然状況も変わって来る。原作が、狭衣の野分の中の訪問Aと、帰宅後の悪夢による消息Bとから成るのに比べ、ここでは男君の来訪の場面だけとなる。しかし、女君が翌日のことを打ち明けることができずに悲しむというその内容には、原作のBの場面に見られる、不吉な予感に不審をいだく男君の姿をも重ね合せている。

語句の面から見てみよう。□の「心騒ぎ」、——の「あやし」、~~~~の「いかに」「いかなる……」など、原作中の不吉な雰囲気をもし出す語句を転用することによって、室町物語は原作の緊迫した状況を場面の中に再現している。また、ここでは歌にも関係が見られる。二人の間で交される⑤⑥は、Bの消息の中

で行われている⑤⑥を念頭に置いて作り直したものであろうし、⑤は悪夢の中で詠まれている⑥とも関係が指摘できる。筋の上から場面が変わる場合にも、このようなかたちで原作のおもむきは活かされるのである。

こうした原作との関わりの一方、他の室町物語との交渉も見逃すことはできない。⁽²⁾例えば、先にあげた⑪に続く場面を考えてみよう。両親に追われる女君は、母に別れ(⑫)、男君の為に文を残す(⑬)。また淀の津では身を王昭君楊貴妃にたとえて悲しむ(⑭)。これらは事情に違いこそあれ、やはり家を出なければならなかった、あるいは離別を余儀なくされた「住吉」や「しぐれ」その他いくつもの室町物語の中で女君達のとった行動とも重なるものである。また、女君の居場所を知って駆けつける男君の姿や、再会後に都へ戻り、幸福な結末を迎えるまでの運びも、それらの作品群と似通う。

「狭衣物語」から、室町物語「さごろも」への改作者を想像するとき、原作「狭衣物語」とともに多くの室町物語類に習熟した作者が、「狭衣物語」をかたわらに置き、何人もの室町物語の姫君や、そこでの表現を思い浮べつつ筆を進めている姿を思ふのである。

注(1) 室町物語は『大成第六』の、原作は『岩波古典大系』の本文を用いた。

(2) これは異本の派生とも関わる問題である。ここでは指摘に留め、後に改めて考察することにした。

おわりに

本稿では、祖本に近いものと想定した一本を用いて、原作たる「狭衣物語」から室町物語「さごろも」への改作を追ってみた。

しかし、前にも述べたように、「さごろも」自体は八種類もの異本を抱え、その一つ一つが内容や性格を異にする作品として完成されている。これらについては機会を改めて論じ、「さごろも」の全体像を捉えてみたいと思う。

(ましま・みやこ 本学大学院博士課程在学中)